

● 論 説

政治・文化からみた新たな中米関係

フランク・チンと

中華系アメリカ文学

李 有成

(訳 羽田朝子)



一

中国人移民の動機は、早期における苦力や華工⁽¹⁾、ひいては「猪仔⁽²⁾」から、ここ数十年の政治や教育、専門などの要因によるものに至るまで、たとえどこに移転するのであろうと、アジア系アメリカ歴史学者である故ロナルド・タカキ (Ronald Takaki) のいう「希望⁽³⁾」から逸脱するものではない。タカキはアジア系アメリカ史に関する大著において、イマニュエル・ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の「近代世界システム」(modern world-system) 理論とその動力を経済に求める説は、アジア移民がなぜ望んで故郷を離れたのかについて部分的にしか説明できていないと指摘し

た。そしてマキシーン・ホン・キングストン (Maxim Hong Kingston) の『チャイナタウンの女武者』(The Woman Warrior) の言葉を借り、「必要」(Necessity) のほか、いくらかは「贅沢」(Extravagance) のためであると言っている。言い換えれば、タカキによれば、生きるための切迫した必要のほか、さらにこれら移民の多くが大きな夢や希望を抱いていたのであり [Takaki 1989: 31]、故郷を離れ、はるばると海を渡ったのは、自らの夢や希望を実現するためであったというのだ。

夢を追求し、希望を実現する過程で、それぞれの世代のディアスポラ華人が直面した歴史的経験や社会の現実は異なっていた。中華系アメリカ人について言えば、早期における主に労働力を売っていた移民やその子孫のアメリカ経

験と、近年における専門技術や個人的理由、家庭の事情による移民の経験とでは当然同じではない。こうした異なる世代の作家では創作に反映されるものも全く違っているのである。この点が最もよく表されているのが、彼らの家^{ホームランド}国に対する想像である。ここでいう「家^{ホームランド}国」とは政治的な意味に限らず、文化的な示唆を含んでいる。「想像」という言葉もフアンタジーとは関係なく、むしろ集体的な属性をもっている。ディアスポラの共同体についていえば、たとえ個人の想像であっても往々にして集体の意思や意義を含んでいるのである。

本論は中華系アメリカ作家の古参であるフランク・チン（趙健秀、Frank Chin）をとりあげ、説明を試みようとするものである。チンが一九七二年に書いた『鶏小屋のチャイナマン』(The Chickencoop Chinaman)〔訳注＝「チャイナマン」は中国系に対する侮蔑語〕という戯曲のなかで、中華系アメリカ劇作家で映画製作者のタム・ラム（林譚、Tam Lum）という登場人物が次のように言っている。「チャイナマンは作りだされたものであり、生まれつきのものではない」〔Chin 1981: 20〕と。その真意は中華系アメリカ人とは結局のところステレオタイプの産物であると我々に気付かせることにある。その二年後、チンは『辰年』(The Year of Dragon)という劇の中で、フレッド(Fred)という中華系アメリカ人を造形している。フレッドは観光ガイド

で、観光客をチャイナタウンに案内することを専門にしている。チンはチャイナタウンのガイドが果たしている役割とは、実は白人が中国人を演じることと同じであり、中華系アメリカ人の形象を商品化しているのだとみなしている。そしてフレッドのような人物は民族的マジヨリティが中華系アメリカ人に対して抱いているステレオタイプを助長しているにすぎないと考えているのだ。チンのこれまでの四十年余りの文学創作や論述活動は、主に白人という民族的マジヨリティの人種差別や文化的偏見に抗議することにあつた。その目的は中華系アメリカ人の歴史を取り戻し、人種のステレオタイプを取り除き、チンのいわゆる英雄主義によって中華系アメリカ文学の伝統を定義づけることにあつたのである。そのためチンの創作は一種の抵抗文学であり、その論述は対立構造をとっている。彼が言及するのは往々にしてアメリカ人のディアスポラの歴史と日常生活の経験である。彼の家^{ホームランド}国の想像は、自身が少年時代に育ったネバダ(Nevada)山地に構築されるのではなく、みながよく知っているチャイナタウンであり、チャイナタウンが具現する中国の庶民文化の伝統なのである。そのため白人の文化的偏見や人種差別を批判、反撃するとき、彼が訴える家^{ホームランド}国の想像というのは基本的に文化的なものであるのだ。

周知のとおり、チンは一貫して自身のいう英雄伝統を尊

び、文学において一種の男性英雄主義を提唱している。彼のこのような立場はたびたび非難を受け、特にマキシーン・ホン・キングストンやエイミ・タン（譚恩美、Amy Tan）ら著名な中華系アメリカ女性作家への攻撃は、性差別であるとみなされた。しかし、このような論点も公平とは限らない可能性がある。その実、チンは林語堂やパーディー・ロウ（劉裔昌、Pardee Lowe）、チン・ヤン・リー（黎錦揚、C. Y. Lee）、デイヴィット・ヘンリー・ホワン（黃哲倫、David Henry Hwang）といった男性作家をも批判している。またほかの女性作家、たとえばスイ・シン・ファー（水仙花、Sui Sin Far）やハン・スーイン（韓素音、Han Suyin）、ダイアナ・チャン（張嫻芳、Diana Chang）らを大いに称賛しているのである。チンの関心は明らかにジェンダー・ポリテイクスにあるのではなく、真正性（オーセンティシティ）ポリテイクス（politics of authenticity）にあるのである。言い換えれば、チンの関心は、これらの作家の手で再現されているのが「真正」の中国文化——彼の家^{ホームランド}の想像において言うところの中国文化——なのかどうかということにあるのだ。チンは自身の構想と異なる文化の想像を唾棄し、白人という民族的マジョリティやその文化と共謀したとして批判するのである。チンからすると、家^{ホームランド}の想像の背後にある文化ポリテイクスは鎮痛や治療を主旨としている。つまり、カナダの哲学者チャールズ・テイラーのいう「修正

の過程」であり [Taylor 1992: 62]、長きにわたって捻じ曲げられてきた民族マイノリティの形象を修正するためのなのである。

チャイナタウンが形作る華人のディアスポラ世界では、チンの目に触れるすべては自身が得々として語る英雄主義の記号である。

私はいつも英雄の伝統に取り囲まれてきた。あれら陶製の人形はみな英雄的人物であり、彼らは粵劇から来ていたり、物語や連環画、絵本で称賛されている戦いに由来している。人形、木偶、浴槽のおもちゃ、印刷物、絵画、画像、そしてすべての中国移民がみな持つており、直感的に理解し、ひろく収集し耳を傾けてきた通俗的な伝説や諺に基づいているのである。 [Chin 1985: 116]

この英雄主義の中心であり、最も重要な人物は『三国志演義』の関羽である。

関羽は決して『三国志演義』の主要な登場人物ではないが、『三国志演義』のなかで最も人気のある人物である。歴史、粵劇や文学において広く人気を得たこの人物は、通俗文化によって戦争や略奪、文学の神へと速やかに変身をとげた。彼は殺し屋や博打打ち、すべての商売人の守護神であるのだ。彼は完璧で清廉な人格と敵討ちの具体的な化身なのである。……すべての

クラブ、団体、各種各様の懇親会、香港の犯罪捜査班から武術の道場、チャイナタウンの秘密結社までがみな争って関羽——多くの人が「関公」（あるいは「関老爺」と呼んでいる——を守護神として祭っているのである。[Chin 1991: 39]

「いはば自伝ではない」（“This Is Not an Autobiography”）という文章の中で、チンは関羽を「踏みにじられ、抑圧される者の戦士であり、腐敗した官吏、政府、帝国と抗争してやまない」[Chin 1985: 120]とまで祭り上げている。面白いことに、チンは表象 (representation) の議論において一貫して「真正であるかどうか」を判断の基準にしており、我々も当然同じ態度で彼の関羽に対する表象を検証することができるだろう。『三国志演義』を少しでも知っている人なら、チンが表象する関羽は、その実少なからず彼自身の文化想像に頼っており、ときに必ずしも『三国志演義』と関係がないことを容易に見抜くであろう。チンの手による関羽の形象は、自身が構想する中国英雄主義を成就させるためのものにすぎない。その目的は白人世界が華人に対して抱いている弱々しく女性化されたステレオタイプや間違った想像を逆転させることにあるのだ。このような家国の想像は主に文化的なものであり、白人という民族的マジョリティとその文化による長きにわたる差別や偏見に対して応酬するためのものなのである。

二

以上で説明してきた文化ポリティクスは、フランク・チンの最初の長編小説『ドナルド・ダックの夢』(Donald Duck) を理解するのに役立つであろう。もしこの小説をポストコロニアルのテクストとしてみなすならば、作者がこのテクストを通して取り戻そうとしたものとは、まさに中華系アメリカ人の美しく輝かしい過去であることに気付くだろう——もちろんこの過去には英雄主義の色彩が満ちており、同時に中華系アメリカ人が長い間歪曲され、抑圧され、周縁化されてきた辛酸に満ちた記憶が織り込まれている。人類学者のフランシス・シュー (Francis L. K. Hsu) の次の文章は、中華系アメリカ人がいかにアメリカの歴史の叙事において姿を消されているかを物語っている。

ユタ州のプロモントリー・ポイント (Promontory Point, Utah) は百年前にユニオン・パシフィック鉄道とセントラル・パシフィック鉄道が接合した場所であり、一九六九年五月一〇日にはこの地でアメリカ大陸横断鉄道開通百周年記念の祝賀が行われた。一万にもものぼる中華系労働者がこの横断鉄道の完成とその急速な建設の一端を担っていた。しかし当時祝賀会を主催した運輸省長官ボルプ (Volpe) はアメリカ人の勇氣

と技術力を熱く讃えたものの、中国人が果たした役割については一言も触れなかった。もちろんボルプの態度は明らかに現在もなお広く存在する白人の偏見からくるものである。いくつかの華人団体が抗議の意を表したが、ボルプ長官は決して公開での謝罪をしなかった。[Hsu 1989: 3]

ボルプが祝賀会で忌避し無視したのは、ちょうど『ドナルド・ダックの夢』という小説が再述し再構築しようとしたものである。それは一九世紀アメリカの大陸横断鉄道の建築史であり、そのなかでもとりわけ中華系労働者が全建設過程において担った重要な役割にかかわっている。言い換えれば、チンの叙事を通して、『ドナルド・ダックの夢』はアメリカの歴史における「裂け目、断絶、非連続性」を暴露しているのであり、この小説が表象する中華系アメリカ人の過去とはまさしく歴史の事実において不可欠な部分なのである。

アメリカのマイノリティ集団はみな、白人のマジョリテイ文化や支配階級と遭遇し、相互に関係しあうなかで、みな血と涙が入り混じった、感動的な民族の記憶を持っているようである。アメリカ先住民は土地を失い絶滅に瀕し、黒人は奴隷貿易の商品となり、日系アメリカ人は収容所で抑留された。華人もエンジェル島 (Angel Island)³ や様々な差別、中華系労働者に対する排斥事件を経験してい

る。こうした過去はアメリカの民族的マイノリティの集合的記憶の一部分を構成しており、民族的マイノリティが反撃を始めた時、その発言の立脚点となったのである。イギリスの文化批評家スチュアート・ホール (Stuart Hall) のいうとおり、「過去は私たちが発言する立脚点であるだけでなく、また私たちが話をするために不可欠なよりどころである」[1989b: 18-19]のだ。しかしホールはまた次のように言っている。過去が我々に語り続けるとき、「我々と過去の関係は子供と母親の関係のようなものであるため、すでに「断絶した後」では、この過去はもはや単なる事実上の「過去」ではない。過去はいつも記憶・幻想・叙事・神話によって構築されるのである」[1989a: 71-72]。⁴

『ドナルド・ダックの夢』において、チンは何度かの夢によって中華系アメリカ人のこうした過去を表象しており、その夢の叙事内容とは主に中国労働者とアイルランド人労働者との鉄道敷設競争の過程をめぐるものである。時代背景は一八六九年四月から五月のことで、中華系労働者が一日に十マイルもの線路を敷設するという空前の記録によってアイルランド人労働者を打ち負かし、ユニオン・パシフィック鉄道とセントラル・パシフィック鉄道を接合してアメリカ大陸横断鉄道を作り上げる。そして中華系労働者たちは、白人の人種差別により自分たちの苦勞の功績が認められるはずがないと知りぬいていたため、敷設した枕

木の最後の一本に自分たちの名前を彫り付ける。「一人の若い男が刷毛を黒いインクに浸し、枕木の表面に自分の名前を書く。刷毛を手渡し、枕木に息を吹きかけてインクを乾かし、書いた文字に沿って掘りはじめる。枕木はびつしりと名前で埋まっている。彫り込まれた名前もあれば、インクだけで書かれた名前もある」【Chin 1991: 116】。彫り込まれたものであれ、インクで書かれたものであれ、それは中華系労働者が歴史に証拠を残すための手段だったのである。中華系労働者はすでに、いわゆる歴史というものは往々にして覇権的な階級や人種がその階級や人種の利益を独占するための文化の場にすぎないと気づいていた。そして民族的マイノリティは自分の力と行動によって、マジョリティの階級や人種による困い込みを突破し、「もう一つの歴史」のために証拠を残さねばならないと考えたのである。中華系労働者たちが掘り込み、書きつけて残したのは個々の名前にすぎないが、これらの名前は疑いなく中華系アメリカ人の集合的記憶の重要な構成要素であるのだ。

ドナルド・ダックは夢でみたすべてのことを裏付けるために、クラスメイトのアーノルド・アゼイリア (Arnold Azalea) と自ら図書館へ行って書物を開いて調べたところ、ある本の一八六九年四月二九日の一節に次のような記載があるのを見つける。「線路の末端に、八名のたくましいアイルランド人の男たちが鉄道工事用の重いヤットコを

手にして立っていた」と。続いてこの八名のアイルランド人の名前が挙げてあった。ドナルドはここまで読んで不可解に思い、つぶやいた。「中国人は名前すら出てこない。僕たちが世界記録を作ったのに、中国人の名前が一人も出てこないなんて。僕たちが名前を記した最後の枕木についても、一言も書かれていない」【Chin 1991: 122】と。その後、ドナルドが父親にこのことを話すと、彼の父親は次のように答えた。

「白人が中国人の名前を自分たちの歴史書に載せたがらないっていうことか。それがどうしたっていうんだ？ お前はびつくりしたっていうのか。中国人自身が自分たちの歴史を書かない以上、白人たちが書いてくれるわけないだろう？」

「そんなの公平じゃない」

「公平？ 何が公平なんだ？ 歴史というのは戦争だ、ゲームじゃないんだぞ！ ……白人たちの奴らが自分たちの本の中で中国人の歴史を書いていないからといって父さんが怒ったり驚いたりすると思っちゃいけない。……自分で歴史を記しておかなければ、それは永遠に失われてしまうんだ。それが天命というものだ」【Chin 1991: 123】

ここでなぜ煩を厭わずにドナルドの夢の部分のあらすじと、その夢がドナルドに対して施した啓蒙や教育につい

て述べたのかというところ、その目的は「もう一つの歴史」がポストコロナアルの主体性や民族的マイノリティの自己属性を構築するという重要な意義について説明するためである。ドナルドの夢は疑いなく、ひとつの贖いと解放の叙事であり、ドナルドはその民族の記憶を取り戻し、民族属性の知識形態を明らかにしたのである。「黒人としての過去もなく、黒人としての未来もないならば、黒人としての本質を持つということも不可能である」[Fanon 1967: 138] というフランツ・ファノン (Frantz Fanon) の言葉は、実はドナルドの身の上にも適用できるのである。

白人の人種差別を嫌というほど受けた中華系アメリカ人のような民族的マイノリティにとって、ドナルドの夢が表象する過去——白人が打ち負かされ、中国人が勝利する——というのは確かに美しく輝かしい過去である。ドナルドは夢を通してその民族の記憶を再構築するとともに、啓蒙儀式を行っており、祝賀活動の中で獅子舞を踊る役目を仰せつかっている。中国人労働者の親方は「クアン」(関) という姓の男だが、この人物は一見してすぐに関羽の化身であり、フランク・チン式の中国英雄主義の具体的な象徴であることがわかる。チンは次のように言っている。「中国文学における英雄の伝統をアメリカ華人社会における普遍的な道徳、倫理、美学の根本とみなすのは、創作技巧を振り回すためでもなく、ひとりよがりに深奥な思想理論を

展開したり、教条を宣伝するためでもない。ただ単純な歴史を語っただけである」[Chin 1985: 27] と。チンは明らかに意識して自身の言う中国英雄主義の伝統を展開することによって、中国とチャイナタウンの文化的な母子関係を再構築したのである。『ドナルド・ダックの夢』という小説では、クアンという男は文化的英雄であるだけでなく、同時にこのような文化的な母子関係を具現する行為者 (agent) でもあるのだ。

ただし『ドナルド・ダックの夢』の叙事の文脈において、クアンという男が表す中国式英雄主義は明らかにほかの意図がある。キング・コック・チェン (張敬珪, King-Kok Cheung) はチンが描く中国式英雄主義について討論したときに次のように指摘している。「『三国志演義』の関羽を例にすると、彼は声が鐘のように大きく、激しい気性で情が深く、仇には必ず報いる。このような「勇猛果敢な英雄の化身」は、物静かで、受動的な、卑屈な東洋人奴隷の形象とはまったく相反するものである。おそらく「チンは」このような威風堂々とした英雄的偶像が、従順でおとなしいアメリカ人という神話を打破するに足ると希望を抱いているのである」[Cheung 1990: 241-242] と。キング・コック・チェンのこの憶測によって、クアン親方の英雄主義を解釈することができる。クアンは臆病ではない上に内向的でもなく、白人との激しい競争の中で少しもひる

まなかつたばかりか、勝利者になったのである。クアン親方という英雄の化身は、従順で、受動的で、臆病な華人の形象と全く一致しておらず、少なくともクアンの姿から我々は幾人かの民族的マイノリティが汲々として作り上げられた肯定的な形象を見出すことができる。

クアンは「セントラル・パシフィック鉄道」の株主である「クローカー (Crocker)」の六連発銃を手にとり、クローカーが恐怖の表情を顔に出す前に、馬の鞍に上がって手綱を握った。手綱をさばいて馬を右往左往させ、クローカーの体中にひとしきり泥を浴びせた。クアンはドナルド・ダックに顔を向け、言った。

「乗るんだ、坊主。おまえに聞かせてやる……」クアンはドナルドを引つ張りあげて、自分の後ろの鞍に乗せ、中国人のキャンプのほうへ走り去った。黒ずくめの服装をした中国人労働者の中を、白い衣装のクローカーが後を追う。クアンは泥が飛び散る中を疾走して、点心を売るキャンプに入っていく、クローカーの六連発銃を三発ぶつばなす。ドナルドはクアンの腰にしがみつきのながら、自分がつるつる滑る泥だらけの馬から滑り落ちそうになるのを感じた。「明日、十マイルだ！」クアンは大声で叫んだ。「十マイルの線路を敷くんだ！」 [Chin 1991: 78]

三

「これは自伝ではない」は一九八五年に発表されており、フランク・チンはこの長文を結ぶときに、二つの答えのない問題を提起している。「アジア系アメリカの芸術はアジア系アメリカ人の現状を変えられるだろうか？ 芸術は歴史を再構築できるのか？」 [Chin 1985: 130] と。チンの主要な論述計画と創作活動は、この二つの問題に答えようとしたものであるようだ。彼の「アジア系アメリカ作家は本物も偽物も集まれ」 (“Come All Ye Asian American Writers of the Real and the Fake”) という文章は、^{チン・ハン・クワン} 真正性ポリティクスによって、白人の中華系アメリカ人に対するステレオタイプに疑問を呈することを企図しており、文章全体に文化や経験の本質主義が満ちている。しかし、これはチンが民族的マイノリティ作家として一貫して堅持している論述戦略なのであり、中華系アメリカ人の肯定的なイメージを再構築するのに拠っている重要な示唆を含む枠組みなのである。『ドナルド・ダックの夢』が提供する「もう一つの歴史」や対立構造をもつ叙事は、チン自身の問題に答えているだけでなく、その公共性、政治性、集本性についてはフレドリック・ジェイムスン (Fredric Jameson) の言う民族的寓言 (national allegory) に分類することができ

る。この小説からは、個人の運命がいかに集体の運命とつながっており、また民族の歴史文化の状況全体をいかに寓言化しているかが読み取れるのである。⁴⁾

類似した寓言化の過程は、チンの二作目の長篇小説『ガング・ディン ハイウェイ』(Gunga Din Highway)においてさらに明らかである。『ガング・ディン ハイウェイ』はチンが提出した問題をさらに広く、深く検討したものである。ほか、具体的にいうと、この小説はチャーリー・チャン(陳查理、Charlie Chan)⁵⁾という記号の記号化の過程を通して、中華系アメリカ人の文化表象と自己表象の問題を回顧、検討、批判することを企図している。それは民族的寓言であるだけでなく、さらに適切にいうなら、それは「アメリカの民族的マイノリティによる自己表象という文化ポリテクスの寓言」[Palumbo-Liu 1994: 81]であるのだ。

『ガング・ディン ハイウェイ』は終始連続して一貫性のある筋や構造になっているのではなく、数え切れないほど多くの事件に触れており、物語の時代背景は第二次世界大戦から一九九〇年代前後までの数十年である。作品中の様々なことは、ロングマン・クワン(関龍曼、Longman Kwan)‘ユリシーズ(Ulysses)’その友人で韓という姓のベネディクト(Benedict Ham)‘張という姓の親友ディエゴ(Diego Chang)’の視点によって叙述されている。クワンはもともと粵劇の名優であり、のちにハリウッドにやってき

て活動し、チャーリー・チャンの四男を演じて有名になり、ハリウッドの銀幕において名高い「死に役のチャイナムン」(the Chinaman Who Dies)である。彼の最大のアメリカン・ドリームは、チャーリー・チャンを演じる最初の中国人になることである——なぜなら銀幕のチャーリー・チャンはいつも白人によって演じられていたからである。彼の見解によれば、「チャーリー・チャンを演じる最初の中華系アメリカ人になりたいと願っても決して分に過ぎるということはない」という [Chin 1994: 16]。移民一世であるクワンのアメリカに対する理解は、アメリカで生まれ育った妻ヒアシンス(Hyacinth)に明らかに及ばない。「中国人男性がハリウッド映画で中国人男性を演じることは永遠に不可能よ」。彼女は次のように言う。「中国人男性に演じさせるより先に、まず白人男性に中国人探偵を演じさせるわ。中国人男性に中国人男性を演じさせるより先に、中国人女性に中国人男性を演じさせる。中国人男性に中国人男性を演じさせるより先に、クイア(queer)の中国人少年を見つけてきて演じさせるべしよなね」[Chin 1994: 36-37]と。

チャーリー・チャンを演じることは、文化表象の権利を獲得することを意味している。中華系アメリカ人にとって、チャーリー・チャンという記号に潜んでいる文化ポリテクスは言わずとも知れたことである。チャーリー・

チャンが具現しているのはアメリカ白人が中国人に対して長い間抱いてきた想像であり、この記号にはアメリカの支配的な種族の、中国人に対する欲望と不安が反映されている。チャーリー・チャンに先立って登場したフー・マンチュー（傅滿洲、Fu Manchu）⁶が常に白人が抱いている悪夢である「黄禍」（黄色人種脅威論、the yellow peril）を象徴しているなら、チャーリー・チャンはそれとは別の極端な「模範的マイノリティ」（the model minority）を体現している。「黄禍」は「軍事と性征服という陽性の脅威」を暗示し、「模範少数エスニシティ」は「受動と適応という陰性の姿態」を表している [Okishio 1994: 142]。具体的に言えば、チャーリー・チャンは白人による人種差別の産物であり、我々が彼の姿に見ているのは、白人の中国人に対する根深いステレオタイプである。彼は白人の発明である上に、白人によって演じられており、ここからはマジョリティ文化によって表象ポリテクスが操作される霸道と抑圧を見ることが出来る。さらに重要なことは、この現象が民族的マイノリティの自己表象の可能性をも否定していることである。

『ガンガ・ディン ハイウエイ』は話の筋が込み入って煩雑であるけれども、基本的な輪郭に筋道がないわけではない。チンは何人かの中華系女性作家の出世作における叙事方法を意識してパロディー化 (parody) しており、様々な

声や角度から煩雑で多様なアメリカ経験を述べている。これら個人あるいは家族のアメリカ経験は、往々にしてさらに大きな文化的意義を含んでいる。なぜならそこでは文化属性、民族アイデンティティ、人種差別、民族の相互作用、文化表象といったテーマに少なからず触れられているからである。『ガンガ・ディン ハイウエイ』は時代背景が半世紀にわたっているだけでなく、空間においてもアメリカ東西の両岸を横切り、西は太平洋に浮かぶ領土にまで及んでおり、サンフランシスコからオークランド (Oakland)、バークレー、ニューヨーク、ハワイに至っている。表面的な小説の叙述は、クアン一家の二世代にわたる家族の伝奇であるが、その叙事詩としての意図は明らかである。チンは意識してこのような家族の伝奇を通して中華系アメリカ人という集体の運命、とりわけ文化表象において長らく受けてきた挫折と屈辱、自己表象における欲望・抗争・失望を描いている。それはある特定の個人とその家族の物語でありながら、同時に民族全体の物語でもあるのだ。『ガンガ・ディン ハイウエイ』は長さの異なる四つの部分に分かれており、チンはこの四つの部分を順に「天地創造」(The Creation)、「この世」(The World)、「あの世」(The Underworld)、「故郷」(Home)と名付けている。作者はその「前言」(“Author's Note”)において、この四つの部分に基づいているのは、中国の創世神話、つまり盤古と女媧の

神話（チンは女媧を盤古の妹としている）であるとして
いる。⁽⁷⁾作者が何に基づいたのかわからないが、その内容は
次のような「五運歴年紀」の記載から逸脱するものではない。
「初めに盤古が生まれ、死を迎えようとしたとき、この
ようにその姿を変えた。吐いた息は風雲となり、声は雷
鳴となり、左目は太陽となり、右目は月となり、手足と胴
体は四方の極地や五岳となり、血は河川となり、筋と血管
は道となり、皮膚は農地となり、鬚髭は星辰となり、産毛
は草木となり、齒と骨は金属となり、精髓は珠玉となり、
汗と涙は雨や露となった」（『緯史』巻一より引用）。盤古
が自然界の創造者であるなら、女媧はというと『淮南子』
の「覽冥訓」に記されているように、「五色の石を練って
蒼天を補修し、大亀の足を断ち切って四隅の柱を立てた」
ほか、やはり人類とあらゆる動物の創造者である。

チンは明らかに意識してこのような創世神話によって全
体の構成をまとめあげている。チャーリー・チャン——白
人というマジョリテイ文化が表象する中国人形象——はま
さにアメリカ華人共同体の盤古である。小説中の登場人物
であるハリウッドの著名な映画スターのスペンサー・トレ
イシー（Spencer Tracy）は次のように言っている。

「チャーリー・チャンが最後の一息を飲み込むと、
彼の息は駆け巡る美しい変革の風雲と化するだろう。

……チャーリー・チャンの左目は美しい太陽となり、

右目は月となる。……チャーリー・チャンの下半身は
五大チャイナタウンと各種の中華料理店一五万軒とな
る。血液は白く変化し、また透明になり、そして美し
い河川や溪澗の甘い流水となる。筋や血管はチャイナ
タウンと郊外地区をつなぐ線路、かけ橋、橋架、トン
ネル、道路になる。筋肉は表土層となり、体毛は麦、
稲、竹、茶や胡椒の木、チーク、シユロ、マユミ、ク
スノキ、カラマツ、マツ、白菜、芥蘭、冬瓜、苦瓜、
生姜、サトウキビ、タロイモとなる。チャーリー・
チャンの歯や骨は鉱物や金属、地質の結晶となる。
チャーリー・チャンの精液は美しい真珠となる。彼の
骨髄は玉となる。チャーリー・チャンの頭髮、眉毛、
髭はハリウッドの上空にきらめく東方の星になるだろ
う……」〔Chin 1994: 46〕

変身神話の転換過程を経た後、ハリウッド文化産業が構
想、生産、複製するチャーリー・チャンはついに拡大さ
れて中華系アメリカ人の創造者や生命の源となったのであ
る——チャーリー・チャンはつまり華人のアメリカであ
り、中華系アメリカ人の祖先であり、後代の者たちはただ
「彼の名譽ある長男、次男、三男、四男の謙虚でおぼつか
ない足跡をたどって前進する」しかないのである〔Yang
1995: 28〕。しかしチャーリー・チャンはずっと前から割り
当てが決まっている役であり、銀幕では彼はひいては白い

肌をしているか、あるいは白い仮面をつけており、白人の表象ポリテクスによって操作される文化的産物でもある。チャーリー・チャンの役目はとうの昔から存在する白人の中国人に対するステレオタイプを複製し、継承させることにあるのである。チャーリー・チャンは役目を終える時、横たわって最後の一息を飲み込み、その息はアメリカチャイナタウンの変革の風雲と化するのである……。

文化表象がこのような畸形の現象を作り出すのは、多くは「象徴権力 (symbolic power) の分配の不平等」からきている [Palumbo-Liu 1994: 78]⁽⁵⁾。これは民族的マイノリティ、女性、第三世界が長い間遭遇してきた共通の運命であり、中華系アメリカ人の状況も例外ではない。すべての象徴権力の分配において、白人は終始デビット・ロイド (David Lloyd) のいう「属性のない主体」(Subject without properties) である。白人が不在の場所はなく、白人に不可能はないという力は、往々にして彼ら自身を普遍性 (universality) の体現者として自任させており、彼らの支配的行動もこれによって自己正当化 (self-legitimizing) を得ている。その実普遍性とは本来、諸刃の剣である。サイド (Edward W. Said) の見解によれば、個人的背景、言語「国民性などは「いつも他者の実情を無視しており」、普遍性とはまさしく上述の個人的な単純で明確な類別を超越するということを意味している。これは普遍性の比較的

積極的な一面である。しかし、普遍性は「外交と社会政策など行政において、人類の行為のために探求され策を弄して高々と掲げられた単一の標準であることも意味している」[Said 1994: xiv]。これは普遍性の横暴な一面である。不幸なことに、ヨーロッパ中心論の抑圧のもとでは、白人が支配する普遍性とは往々にして後者の意味が前者よりも大きいのである。このため、デビット・ロイドは次のように指摘している。白人がどこでも普遍性の体現者として自任することができるのは、その実「実際への無関心」(literal indifference) によるものであり、またサイドの言う「他人の実情を無視」しているからなのである。この属性のない主体が自信満々に、普遍性の体現者として自らを任じているのは、「純粋交換可能性」(pure exchangeability) によってもたらされた結果である。白人はいかなる人の地位にもとってかわり、いかなる人の場所をも占領できうという自信をもっているのである。彼がもし普遍的な存在なら、その他の人々はどうしても個別・部分・不完全に分類されることになら [Lloyd 1991: 70]。純粋交換可能性に基づき、その体現する普遍性に基づいて、白人は文化の表象や実践においてためらうことなく民族的マイノリティを体現／表象 (represent) する役目を担うのである。この点はマルクスの次の言葉と皮肉にも対応している。「彼らが自分を体現することができないなら、他人によって体現されな

ければならぬ」[Marx 1986: 254]。ただしマルクスの言う「彼ら」とはプロレタリアのことであり、「他人」とは白人という支配階級のことではない。

この完璧で超越した、偏りのない、いつも存在する「属性のない主体」として自任する者は、民族的マイノリティの文化表象の立場を奪い、民族的マイノリティの自己表象の実践の場を占領しているのである。白人による中華系アメリカ人の文化表象を掘り下げるのであれ、中華系アメリカ人による文化の自己表象を検討するのであれ、『ガンガ・ディン ハイウェイ』の最終的な関心はやはり上述の「表象の危機」からくるものである。チャーリー・チャンは文化的マジョリティが発明したものであり、これはどうしようもない歴史の事実である以上、「チャーリー・チャンは死んだ」ことを宣言し、チャーリー・チャンを中華系アメリカ人の集合的記憶から切り離して埋葬するならともかく、そうでない限りは眼前の主な関心とは「いかに表象するか」の問題であり、いかに表象するかとはまた「誰が表象するか」にかかわってくるのである。

ここでチャーリー・チャンを演じる最初の中系系アメリカ人になりたいという、クアンの生涯の夢にかかわってくる。クアンの夢は必ずしも文化の自己表象についての考慮から意識的に生まれたというわけではない。上述したように、彼はその生涯で二つの役を繰り返し演じてきた。一つ

はチャーリー・チャンの四男、もうひとつは死に役のチャイナマンである。クアンは息子が自分の演じる映画を軽んじており、また自分自身をも軽んじていることを感じている [Chin 1994: 36]。中華系アメリカ人の身分で最初にチャーリー・チャンを演じたいと願うことは、おそらく彼が一生に夢見ることのできる小さな勝利にすぎず——これによって息子の自分に対する印象を変えることができるのだ。残念なことにクアンは一生を終えるまでチャーリー・チャンの四男と死に役のチャイナマンしか演じることができず、死ぬまで彼に新作のチャーリー・チャンの役を要請する者は出てこなかったようだ。彼の葬儀では新チャーリー・チャン映画に関わるキャストがそろったが、それがこれが宣伝価値のある場だったからである。チンはユリシーズの観察を通して、この場面を次のように描写している。

彼らは私の父の葬儀に参加しにやって来て、新チャーリー・チャンを演じたいと願う白人や、新しい息子役を望むハリウッドの黄色人種が元四男役の葬儀に姿を現した。本物もいれば偽物もいる二世代のチャーリー・チャンとその息子たち、新作映画で脚本を書くパンドラという値千金の中系系アメリカ人作家がみな会場にやってきて、チャーリー・チャンの亡くなった四男に敬意を表していた。 [Chin 1994: 389]

フランク・チンの文化想像において、新しいチャーリー・チャンは依然としてガンガディン・コンプレックスの投影あるいは具体的象徴である。チャーリー・チャンの亡霊は中華系アメリカ人たちの間をさまよい、各種の新旧の勢力が連盟を結び、チャーリー・チャンの亡霊をさまよい続けさせているのだ……。

注

〈1〉マキシン・ホン・キングストンはその自伝的小説『チャイナタウンの女武者』の第一章「名のない女」(No. "Name Woman")において、自身の母親が語る家族の秘密に触れている。マキシンの名のない叔母は夫が遠くアメリカへ渡った後に妊娠し、このことはもちろん保守的な村で許されるわけはなく、最後に井戸に身を投げて自殺する。作者の母親にとつてみれば、良くない時代のものである。いかにして生き続けるかが「必要」で変えがたい道理であり、このほかは自ら望んだにしろそうでなかったにしろ、姦通や婚外子を生むことは「贅沢」であったのである [Kingston 1997: 6-7]。作者の言葉を用いれば、「よき時代には姦通はただの過ちにすぎないかもしれないが、村で食料が不足していた時代には大罪となったのである」 [Kingston 1997: 15]。黄秀玲 (Sau-ling Cynthia Wong) は後にキングストンのこの二つの比喩を用い、アジア系アメ

リカ文学の生産の境遇について説明している。「必要」と「贅沢」という二つの言葉は、生存と行為という二種類の対比的な形態を意味している。ひとつは従容として自制し、生活を考慮し、保守の傾向がある。もう一つは自由に偏り、節制を欠き、情感が溢れ、創作の自主が存在する」 [Wong 1993: 13] と。黄秀玲の関連する観念は、最も早いもので彼女の『チャイナタウンの女武者』に対する解説に見える [Wong 1988]。

〈2〉劉伯驥『美国華僑史』は、こうした歴史について簡明な解説をしており、参考にする価値がある [劉 1976: 274-278, 613-619]。このほか、タカキの著書 [Takaki 1989: 84-87] も参考にできる。

〈3〉ここで、キング・コック・チェンの観点がこのような英雄主義を称揚することにあるのではないことを指摘しておきたい。彼女は一方では、もしこのような伝統があるとすれば、この伝統は一般に武力よりもまず慈悲を重んじていると考えている。そしてもう一方では、このような英雄主義は家父長制の観念と行為を助長させる可能性があることを懸念している [Cheung 1990: 241-243]。

〈4〉ジェイムズは「すべての第三世界のテクストは必然的に……寓言である」であり、さらに彼のいう「民族的寓言」として読むべきである [Jameson 1991: 69] と考えている。ジェイムズはもちろん第三世界の複雑性を理解しているが、第三世界の国家はみな類似した歴史的経緯、つまり植民主義や帝国主義の支配を受けた経緯をしてきた

とみなしている。第一世界とは資本主義世界であり、第二世界とは社会主義の陣営である [Janson 1991: 67]。ジェイムスの論文は一九八六年に発表されており、当然のことながらソ連と東欧社会主義陣営の解体をまだ見ていない。ジェイムスはまた自らも認める簡略化すぎる方法で資本主義の文化あるいは「西洋リアリズム、モダニズム小説の文化」を二つに分けている。つまり小我と大我、詩と政治、性や無意識と階級や経済といった、世俗的な政治権力の公衆世界が構成する次元の上での分断であり、言い換えれば、「フロイト対マルクス」である [Janson 1991: 69]。第三世界の文学は後者に属するのであろう。ジェイムスの第三世界文学理論は大きな反響を引き起こした。最も厳しい批判はインドのマルクス主義学者アイジャーズ・アーマッド (Aijaz Ahmad) によるものであった。彼はそもそも三つの世界に分けることに賛同しておらず、さらに重要なのはジェイムスが根本的に第三世界の文化、言語、歴史、政治、経済における複雑性や異質性を無視していることとみなしたことである。アイジャーズ・アーマッドはとりわけジェイムスがそれぞれ生産モデル(資本主義と社会主義)によって第一世界と第二世界を描きだし、また外部からの抑圧経験(帝国による被植民の経験)によって第三世界を定義づけたことに不満を持ったのである。彼は前の二者が人類の歴史を創造する主体であり、後者が歴史の客体にすぎないことを意味しているにほかならないと考えたのだ。ただしアイジャーズ・アーマッドはジェイム

スの民族的寓言の説を完全に否定しているわけではない。彼はただジェイムスが一部によって全体を説明し、自身が読んだことのあるいくつかの英文の創作や英語に翻訳された第三世界の文学作品だけに基づいて、「すべて」の第三世界の文学が民族的寓言だと認定するべきでないと考えているのだ。実は第一世界——たとえばアメリカ——の文学のなかにも多くの民族的寓言がある。面白いことに、アイジャーズ・アーマッドが列挙したアメリカ文学作品の中には、民族的マイノリティや女性の創作が多くあった。たとえばリチャード・ライト (Richard Wright) 『アメリカの息子』 (Native Son) 、ラルフ・エリソン (Ralph Ellison) 『見えぬ人間』 (Invisible Man) 、アドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich) 『あなたの祖国、あなたの生』 (Your Native Land, Your Life) などである [Ahmad 1992: 95-122]。もう一人のインドの学者マダバワリヤー・プラサード (Madhava Prasad) はジェイムスを擁護して次のように言っている。「第三世界」という記号は、ジェイムスの文脈において新しい意味を得ている」のであり、この言葉はある特定の時空を指しており、その時空の特色とは資本主義の全世界統一の歴史とかかわりがあるのだ [Prasad 1992: 60]。と。アーマッドは第三世界の文学のほとんどが民族主義から生まれているという説に疑義を提出しているが、この立場は理論の普遍化を排斥するものである。プラサードはこのために第三世界文学のさらに厳格で、広汎で、複雑な理論を構築する機会を失うことになると考え

たのである [Prasad 1992: 72]。

〈5〉「象徴権力」という言葉は、ラカン(Jacques Lacan)の鏡像段階 (the Mirror Stage) 論から生まれたものである。ラカンの見解によれば、六か月から一八か月の幼児は鏡に映る自分の姿や周りにいる他者 (the others) によって自我を形成する。これが鏡像段階の想像界 (Imaginary order) である。しかしこの段階に初步的に形成される自我にはまだ主体が構築されておらず、想像界から象徴界 (Symbolic order) へと進まなくてはならない。この言語記号を使用する段階に入った後、はじめて主体性 (subjectivity) が形成されていくのである [Lacan 1977: 1-2]。このようであったとしても、ラカンは言語記号の段階も異化と否定に満ちており、象徴はつまりは無上の法則 (the Law) による制限を受けており、他者の媒介機能でもあると考えている。

中華系アメリカ人の自我が象徴界に進んでいく時、白人という他者の無上の法則を受け入れざるをえず、「これを拒絶するか、あるいははする方法がない」ということは、主体が想像界に逆戻りすることを意味しており、これが非存在 (nonbeing) の段階である [Palumbo-Liu 1994: 79]。

〈9〉「チャーリー・チャンは死んだ」(“Charlie Chan Is Dead”) というのはフィリピン系アメリカ人女性作家ジェシカ・ヘゲドン (Jessica Hagedorn) が近年編纂した現代アジア系アメリカ小説選集の書名である。ヘゲドンは一緒論 (“Introduction”) において「表象の危機」の問題について触れ、次のように言っている。「私たちの想像力に対

する植民は無情であり、脱却しがたいものである。我々が行くところすべてで表れ出てくる形象は私たちのものとは合致しないのである」 [Hagedorn 1993: xxiii]、と。

〈7〉 サードは西洋のメディアが非西洋の「現地人」 (“natives”) をいかに表象するかを検討したときも類似した問題に着目している。論争の焦点は表象の内容だけでなく、その形式にもあるとし、「何を語るのかにあるだけでなく、いかに、誰が、どこで、誰のために語るのかにもある」と述べている [Said 1993: 21]。

訳注

(1) 華工・手に職を持たず単純労働者として働く中国系移民を指す。

(2) 猪仔 (“豚の子”) の意。一九世紀の中国系移民で、「猪仔売買」(Selling Pig) と呼ばれる、身代金、旅費、前借などによって一種の債務奴隷として一定期間身分を顧主にばられた契約移民のことを指す。彼らの多くが中国南部の貧しい農民で、「豚の子」のように悲惨な条件で移住させられたことから、この名が付けられた。

(3) エンジェル島・カリフォルニア州サンフランシスコ湾内にある小さな島。一八八二年の中国人排斥法の成立後、一九二〇年から一九四〇年にかけて移民管理施設が置かれ、中国人移民に対して厳しい入国審査が行われた。

(4) 引用の日本語訳については、福田廣司訳『ドナルド・

ダックの夢』(早川書房、一九九四年)を参考にした。以下の引用も同様である。

(5) チャーリー・チャン・アメリカの作家アール・デル・ビガーズ(一八八四—一九三三)が一九二〇年代から三〇年代にかけて発表した連作小説の主人公。ホノルル警察に勤務する中国人探偵で、片言の英語を話し、小太りで背が低く、風采があがらないが、その抜け目のなさや東洋的な忍耐と第六感によって難解な殺人事件を解決する。小説はベストセラーになり、数多くのチャーリー・チャン映画が制作された。

(6) フー・マンチュー…イギリスの作家サックス・ローマー(一八八三—一九五九)が一九一〇年代に発表した連作小説の主人公で、世界征服を目指す中国人の悪人である。作品の中では、西洋の知識と科学を、西洋的同情心や道徳を理解することなくマスターし、西欧による支配体制の破壊と、東洋人による世界征服を目指して陰謀をめぐらす人物として描かれている。

(7) 盤古とは、中国神話の神で、宇宙開闢の創世神とされる。天地ができる以前の混沌とした状態から出現したという。天地が形成された後に亡くなり、その死体から万物が生成されたと伝えられている。女媧とは、中国神話に登場する女神で、土と縄で人類を創造したとされる。また、天を支える四極の柱が傾いて、世界が破滅的な状態となった時、その壊れた天を補修したと伝えられている。

引用文献

〈中国語〉

劉伯驥 1976 『美国華僑史』台北：黎明文化事業公司

〈英語〉

Ahmad, Aijaz 1992 *In Theory: Classes, Nations, Literatures*. London and New York: Verso.

Cheung, King-Kok 1990 "The Woman Warrior versus The Chinaman Pacific: Must a Chinese American Critic Choose between Feminism and Heroism?" Marianne Hirsch and Evelyn Fox Keller, eds. *Conflicts in Feminism*. New York and London: Routledge. 234-251.

Chin, Frank 1981 *The Chickeneep Chinaman and The Year of Dragon*. Seattle and London: University of Washington Press.

Chin, Frank 1985 "This is Not an Autobiography." *Genre* 18: 109-130.

Chin, Frank 1991 "Come All Ye Asian American Writers of the Real and the Fake." Jeffery Paul Chan et al., eds. *The Big Aiiieeee! An Anthology of Chinese and Japanese American Literature*. New York: Meridian. 1-92.

Chin, Frank 1991 *Donald Duk*. Minneapolis: Coffee House Press.

Chin, Frank 1994 *Gunga Din Highway*. Minneapolis: Coffee House Press.

Fanon, Frantz 1967 *Black Skin, White Masks*. Trans. Charles Lam

- Markmann. New York: Grove Press.
- Hagedorn, Jessica 1993 *Charlie Chan Is Dead: An Anthology of Contemporary Asian American Fiction*. New York: Penguin Books.
- Hall, Stuart 1989a "Cultural Identity and Cinematic Representation." *Framework* 36: 68-81.
- Hall, Stuart 1989b "Ethnicity: Identity and Difference." *Radical America* 23, 4: 9-20.
- Hsu, Francis L. K. 1989 "Opportunity, Prejudice and Cultural Differences." *Journal of Overseas Chinese Studies* 1 (June): 3-26.
- Jameson, Fredric 1991 *Postmodernism, or, The Cultural Logic of Late Capitalism*. Durham: Duke University Press.
- Kingston, Maxine Hong 1977 *The Woman Warrior: Memoir of a Girlhood Among Ghosts*. New York: Vintage Books.
- Lacan, Jacques 1977 *Écrits: A Selection*. Trans. Alan Sheridan. New York and London: W. W. Norton & Co.
- Lloyd, David 1991 "Race under Representation." *Oxford Literary Review* 13, 1-2: 62-94.
- Marx, Karl 1986 *The Eighteenth Brumaire of Louis Bonaparte*. Jon Elster, ed. *Karl Marx: A Reader*. London and New York: Cambridge University Press.
- Okishio, Gary Y. 1994 *Margins and Mainstreams: Asians in American History and Culture*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Palumbo-Liu, David 1994 "The Minority Self as Other: Problematics of Representation in Asian-American Literature." *Cultural Critique* 28 (Fall): 75-102.
- Prasad, Madhava 1992 "On the Question of a Theory of (Third World) Literature." *Social Text* 31/32: 57-83.
- Said, Edward W. 1993 *Culture and Imperialism*. New York: Alfred A. Knopf.
- Said, Edward W. 1994 *Representations of the Intellectual: The 1993 Keith Lectures*. New York: Pantheon Books.
- Takaki, Ronald 1989 *Strangers from a Different Shore: A History of Asian Americans*. Boston, Toronto and London: Little, Brown.
- Taylor, Charles 1992 "The Politics of Recognition." Amy Gutmann, ed. *Multiculturalism and "The Politics of Recognition"*. Princeton: Princeton University Press. 25-73.
- Wong, Sau-ling Cynthia 1988 "Necessity and Extravagance in Maxine Hong Kingston's *The Woman Warrior*: Art and the Ethnic Experience." *MEIUS* 15, 1 (Spring): 3-26.
- Wong, Sau-ling Cynthia 1993 *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. Princeton: Princeton University Press.
- Yang, Jeff 1995 "Secret Asian Man: Live and Let Dialect." *Voice Literary Supplement* 133 (March): 26-28.